

## 展覧会について

20年程前、静岡で開催されたバルーン・アート・フェスティバルなるものを見に行ったことがあったが、なぜわざわざそのような遠い場所でのイベントに出かけたのかも思い出せないし、どのような表現者が参加していたかも判然としない。ただ、なぜか笠原出の作品だけは記憶に刷り込まれている。それは「笑う」のっぺらぼうの主人公の表現だけではなく、見せ方の巧みさから来ていたのかもしれない。いずれにせよ、その前後からなんとなく気になる若い表現者の一人として彼は存在していた。

その彼が近年は絵画を主に活発に展示活動をしている。今回も、「笑う精霊」が主人公ではあるが、その奥に「パベルの塔」であったり、「静物」が描かれる。笠原がどれほど意識しているかはわからないが、前者は「業」であり、それによる不和であり、崩壊であり、後者はもともと「ナチュラ・モルタ＝死んだ自然」からきた言葉であり、死であり腐敗なのだ。だからこそ死を生き、復活したと考えるダリは、DNAが発見された後に「生きている静物」という絵を描いたのだ。それはともかくとして、笠原の作品からは、おぼろげに見えるまるで彼岸の世界のような現世のさらにこちら側に不安げにそして喜々として、あるいはシニカルに浮遊する笑うのっぺらぼうが、まるで彼方の、森羅万象の奥に潜む不可知の世界を知りたいと、存在とは何かを問いかけていると思われるのだ。

岡村 多佳夫（おかむら・たかお）／美術評論家